

『信じて命を得る』ヨハネ20:30-31

20:30 イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

●序論

今日のところをこの福音書の締めくくりとして注目し、皆さんと耳を傾けます。そこにある大切な執筆意図がはっきりとさせています。

それが今日のタイトルにある通り、「信じて命を得る」ということです。

ヨハネは、この福音書をまだ見ぬ人たちが読んだ人が、だれでもイエスさまを信じることを意識しています。のちの時代のユダヤ人だけでなく全世界の人々に向けて、信じて命を得るべき福音として示して祈るです。

それはまさに、明日行われる関西聖会のテーマ聖句に示されている通りです。

わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。（ローマ1:16）

●本論

I. 最も大切なことに注目するため

今年の教会で掲げられている標語「主にある望みを証ししよう」。

ヨハネによる福音書を皆さんと共に読んできました。

その一つのきっかけとなった本。

「聖書が語るいのちの希望」※聖書・ヨハネの福音書（リビング・バイブル）付《副題》社会を揺るがすパンデミックの中で一変することのない確かなもの一と。
…実際の中身は、最初の数ページを除き、すべてヨハネの福音書そのものです。

「新型コロナ禍」…3年数か月の間、世界中が苦しみました。それは病気というもののだけでなく、心をも殺伐とした状況に追い込んだ見えない脅威でもありました。

象徴するかのように、そこではいろいろな言葉が生まれました。

「不要不急」、自粛警察、マスク警察、…などなど

その中のいくつかは、誰かを責め立て、傷つけ、悪人にするような言葉でもありました。

行き過ぎた正義感や、歪められた噂などで、怒りを燃やし、また苦しんだ人や追い込まれた人も多くいたことと思います。

この本の中でヨハネの福音書を掲載する前の序文にこう記されていました。

紀元一世紀のイスラエルの社会においても、一人の人物を巡って、さまざまうわさが飛び交っていました。…

「良い人だ」という評判もあれば、「群衆を惑わしている」という悪評もありました。…このイエスこそが昔から預言されてきた「救い主（キリスト）」ではないかと期待し、喜んでイエスに従う者たちもいました。

人々は、イエスさまを噂し、色々と評価し意見したのです。

その時代の人々を見、そしてその後の時代を生き抜いた周囲の時代の人々に向けて、本当のイエス様の言葉と、そのなさったことを示す、それがこの書が記された目的だとヨハネ自身が示しました。

それは、だれかのうわさ話ではありません。ヨハネ自身が目撃し、触れたお方をその事実ありのままに証言するのです。

ヨハネのそのスタンスは、のちに諸教会に宛てた手紙でも記されています。

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について——このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。（1ヨハネ1:1-2）

ヨハネが、最も大切にしたこと。それはイエスさまの言葉と、そのなさったことを、誰にでもまっすぐに知らせることであったのです。

Ⅱ. イエスを救い主と信じるため

ヨハネの福音書はイエスさまの「伝記物語」ではなく、そこには目的がありました。

:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

まず、イエスさまがキリスト（救い主）だることを知り、信じるようになる目的をもって記された書であるということです。

その目的を果たすための記事のみに絞り込んだ内容が、ヨハネの福音書です。ですからあれもこれも、すべてを記したわけではありません。

20:30 イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

人々が「イエスをキリストと信じるため」に必要な、十分な内容を絞り込み、また体系立てて記したのです。そこに聖霊の導きと助けがありました。

ですから、この書では多くの「奇跡」と表現することを「しるし」表します。

2:11 イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行い、その栄光を現された。そして弟子たちはイエスを信じた。

さらに、イエスさまがご自分を現された言葉をもっても「しるし」としています。

「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。（ヨハネ8:12）

わたしたちがこれらの言葉を読むとき、耳を傾ける時、イエスさまが、自分に語ってくださる御声として聞くように招かれています。

今を生きるわたしたちにの状況下においても、希望を与えてくれます。励ましを与え、道を示してくれる言葉となるために、ヨハネは、この書を記しているのです。

世の光なるイエスさまに出会って聞く言葉です。「…わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。(ヨハネ8:12)

先ほど賛美した「声」と言う賛美には、そういう御言葉体験が短くあらわされています。

♪愛する その声 わたしを慰(なぐ)める いのちを 与える あなたのみことば

わたしたちは聖霊なる神さまの助けをいただいて、一緒にこの礼拝の中で神さまの御声に耳を傾けています。この御声の主こそ、救い主・キリストであることを。

Ⅲ. 信じて命を得るため

先ほど紹介した本で紹介されている本の中で、…

「死んだらどうなるの？」という問いかけをめぐって、こんな風に記されていました。

…そもそも生きるということは、他者の死を経験し続けるということでもあり、この喪失の悲しみを経験しない人はいません。

病、事故、事件、戦争、災害…。大勢の人の死のニュースを聞き、大切な人の死に触れ、必ず訪れる自分自身の死について思い、人という存在のはかなさを思うとき、イエスが自分のことを紹介した別の言葉を思い出します。

「このわたしが、死人を生き返らせ、もう一度いのちを与えるのです。わたしを信じる者は、たとえほかの人と同じように死んでも、また生きるのです。

」(ヨハネ11:25リビング・バイブル)

そうして、イエスさまの十字架と復活の出来事を紹介して、さらにこう続けます。

このイエスを信じる者には地上の人生の死で終わることのない「永遠のいのち」が与えられると約束しているのです。

あらゆる時代のあらゆる地域に生きた人々が、このイエスの言葉に希望を見いだしました。そして天国の希望を単なる「絵空事」としてではなく、信じるべき確かなこととして受け入れ、死への恐れや不安ではなく、希望を告白しながら生涯を終えてきたのです。

だから、ヨハネはこの福音書を取り上げています。

「そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。」と。

皆がこの救いに与って欲しい。という願いがここに 있습니다。

●おわりに

あのコロナの期間に、コロナ理由ではないのですが、5人の方々を天に送ったことを覚えています。それぞれが、あの頃の不自由さを経験する中で、最後の時を家族と共に過ごし、天に送り、また葬儀を行うことができました。そこではいつでも、復活の希望、御国の希望を共有することができた幸いがありました。

「ただキリストを信じ、つながり、永遠の命を得て生きること」、それが救いです。年齢を重ねて、できないことや不自由さを知ることもあるでしょう。若くあっても病の中でそういう経験の中に置かれることもあります。

自分が何でもできるから、救われるのではありません。極端なことを言えば、自分が”信じることができる”から、救われているのではないのです。

信じられない自分をも、頼りない自分をも、また何もできなくなってしまった、そんな自分をも、その大きな愛をもって包んでくれるイエスさまいることを知っていただきたいのです。このイエスさまが、そんなわたしたちを救ってくださるのです。

先週、トマスの時にもこうお話ししました。

「わたしの救いは、（わたしの側ではなく）イエスさまにある」と知ることです。

それは神さまの側の愛と情熱に裏打ちされた確かな救いです。

ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。

それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

だから、信じましょう。またあなたの家族に、そして友人たちに、ぜひこの主にある希望を証しする者となってほしいのです。どんな境遇も、どんな時代にも、人を生かす本物の希望が、イエスさまにこそあるのですから！